

如来滅後五百歳始観心本尊抄 日蓮撰

日亨上人は「大聖人滅後四百年間に、本抄を大聖人さまの意の如く信敬し奉つて、慎んで現当を利益すべく本抄を残したのは、保田妙本寺の日我上人（日師系）と、吾山の二十六代日寛上人のみ」と言われ、富士系に稀に見る広学の要法寺日辰すらのをはずした読みかたをしており、特に大聖人より直伝をうけた若宮の富木日常及びその門下にも光彩を放つべき意見がなく、況んや相伝もなかった。しかも、大聖人滅すると、自ら天台沙門となつた五老の門下には「凡智の研鑽に肱をたく衆は多くとも、聖智に遠かりて益々方針を失する傾きのみあるは慨いても猶あまりある次第である」と、断言せられておるのである。

私は今、日我上人を参考とし、日寛上人の観心本尊抄文段によつて、表題の題号を私見をまじえず説明して、読者が、観心本尊抄の本文を読まれることを希望して筆をすめるものである。

如来滅後五百歳始観心本尊抄とあるが、これを、

(一) 後五百歳に始めて心を観る本尊抄

(二) 後五百歳の始め心をみる本尊抄

(三) 後五百歳に始めたる心の本尊を見る抄

(四) 後五百歳に始まる観心本尊抄

これらの読み方は、時、法、題意をもつて読むものであるが信用するに足らない。

如来滅後五五百歳とは、これは上行出世の時をあかすのであって、始の字は、上行始めて弘むるの義である。観心はこれ文底所被の機縁の観心を明かすのである。本尊はこれ人即法の本尊を明かすのである。

始の字は万年救護の本尊の讚文に、上行菩薩世に出現して始めてこれを弘宣す云々の明文があるから証言は十分である。

観心本尊については前述の如く、(一)——(四)までのよみかたがあるが、これ等の私見をもつて読んだり、知ったかぶりの読み方は一向にしないで卒直に観心の本尊抄と読む。これは、教相の本尊に対して観心の本尊と言う意であるからである。例えば、三大秘法の本門の本尊と言うのは迹門の本尊をえらび本門の本尊を踏むすのと同様である。

開目抄に「一念三千の法門は但法華経の本門寿量品の文の底にしづめたり」(全集一八九ページ)

ジ) 一念三千の法門は觀心の法門である。文底をもつて觀心の法門と名づける。故に、文上の法門は皆教相に属するのである。これをもつて、教相の本尊と觀心の本尊との相違がわかる。

始の字の意味は、正法時代、像法時代(註一)に未だ弘めずの意を正とするが、その傍から、一閻浮提に始めて弘むるの意味があるのである。

本尊問答抄に「此の御本尊は世尊とき置かせ給ひて後二千二百三十余年が間一閻浮提の内に未だ弘めたる人侯はず、乃至当時こそ弘まらせ給うべき時に当りて候」(全集三七三ページ)万年救護の御本尊の讚文に「大覺世尊御入滅後、二千余年を経歴す、しかりと雖も月漢日三ヶ国の間未だ此の大本尊ましまさず、或は知つて之れを弘めず、或は之れを知らず、我が慈父仏智を以つてこれを隱留し末法のために之れを残す、後五百歳の時、上行菩薩世に出現して始めて之れを弘宣す」とある。

故に如上の理を了すれば、当抄の題号は、如来滅後後五百歳に上行菩薩始む觀心本尊抄となるのである。

では觀心とは誰人の觀心をさすかと言え、末法の我等衆生の觀心である。それは觀心本尊抄

の末又「此の時地涌の菩薩始めて世に出現し但、妙法蓮華經の五字を以て幼稚に服せしむ」（全集二五三ページ）或いは「仏大慈悲を起し五字の内に此の珠をつつみ、末代幼稚の頸にかけさしめ給う」（全集二五四ページ）この文中において服せしむ、或いはかけさしめ給うはこれ觀心であつて、末代幼稚とは今時いましむの我等衆生のことである。

「此こゝに「仏大慈悲を起こして」と仰せられておりますが、この仏とは日蓮大聖人自らのことであります。それは大御本尊を建立遊ばされ頸にかけさしめる御方は大聖人であらせられること、また開目抄に、主師親であらせられることをおあかし遊ばされ「慈悲のすぐれたるは、天台、伝教も恐れをもちだきぬべし」との玉い、身命をすてても、一切衆生を仏にせんとの大慈悲の上にお立ち遊ばされたことを考え合せば、領解し奉ることができます」（日淳上人全集四八二ページ）非常にわかりやすい御指南なので特別にここに引用した。

さて、では末法の我等衆生の觀心とはなにかというと、従来いう所の觀心とはことなつて、当宗の觀心とは本門の本尊を受持して信心專一に、南無妙法蓮華經と唱え奉るこれを文底事行の一念三千の觀心と名づけるのである。

十章抄に「南無妙法蓮華經を心に存すべきことは一念三千の觀法なり、これは智者の行解なり、日本国の在家の者にはただ一向に南無妙法蓮華經と唱えさすべし、名は必らず、体に至るの徳あり」（全集二二七四ページ）とある。

信心口唱のみでどうして観行（心に理を観じて、理の如く身に之れを行うこと）を成就するかと
言うると、本尊を信じて南無妙法蓮華経と唱えることにより、信ずる所の本尊、唱える所の南無
妙法蓮華経の、仏力と法力によって速やかに観行を成就するのである。

故に当体義妙には、

「法華経を信じて南無妙法蓮華経と唱える人は、煩惱、業、苦（註二）の三道は、法身、般若、
解脱（註三）の三徳と転じて、三観三諦（註四）即一心に顕はれ、その人所住の処は常寂光土な
り。（略）本門寿量の当体蓮華の仏とは、日蓮が弟子檀那等の中の事なり、是れ即ち法華の当
体、自在神力の顕はす所の功能なり、敢てこれを疑うべからず」（全集五一二ページ）とあるの
がそれである。

但だ法華経を信ずるのが信力であり、南無妙法蓮華経と唱えるのは行力であり、法華の当体と
は法力である。妙法の三力とは、法力、仏力、信力を言うので、臨終の時に南無妙法蓮華経と唱
えれば、妙法の三方の功德によつて速やかに菩提を成ずとは、ここからきておるのである。

次に本尊とは如何なるものかという、我等衆生の受持の法体、信ずるところ唱えるところ
の曼荼羅（註五）である。日蓮門下一般は、釈尊在世の法華本門八品の儀式を以つて本尊とみな
しておるが、観心本尊抄を信心の眼をもつてみるならば、そんなことは一応の解釈である。釈尊
在世の本門八品（註六）の儀式はただ在世脱益の本尊であつて末法下種の本尊ではない。故に本

尊抄の中ではこれを区別するために、文底深秘の大法、本地難思、境智冥合本有無作の事の一念三千の妙法五字をとって末代幼稚の本尊としているのである。

仏（大聖人のこと）大慈悲を起こして我が証得の全体を一幅に図顕して末代幼稚に授く、故に我等ただ此の本尊を信受し余事をまじえず南無妙法蓮華経と唱え奉ればその義を知らずと言うと雖も自然に自受用身即一念三千の本尊を知るようになり、その境地に至れば我が色心（物と心）の全体が事の一念三千の本尊に当たるといふことを知るようになり、それは赤ん坊が乳を含むに、その味を知らないが、自然にその体を養うようなものである。先述では本尊とは如何なるものかをお話ししたが、本尊のもう一面を論じてみよう。本尊の名義とは如何なるかを考えてみると、

大聖人は、「一切衆生の尊敬すべきもの三つあり所謂主師親これなり」と言われておるが、如何なる宗旨でも主師親を根本としてこれを本尊としている。即ち儒家では三皇五帝を、俱舎、成実、律宗、禅宗は三蔵の小釈迦を本尊とし、法相、三論の二宗は、通教の大釈迦を本尊とし、浄土宗は阿弥陀仏を、華嚴宗はビルシヤナ法身、真言宗は大日如来を、天台大師は阿弥陀を本尊とし、別時には一念三千の時は、南岳所伝の十一面観音を本尊とし、法華三昧の中には法華経一部を以て本尊とする。伝教大師の迹門戒壇の本尊は迹門の釈尊であるが、根本中堂の本尊は薬師如来である。

さて斯くの如くいろいろの宗派は本尊にことなりがあつても、皆仏さまをもつて本尊としておるが、日蓮正宗の御本尊だけは、仏の中においても、本門の仏をもつて脇士とするところの妙法蓮華經の五字の本尊である。

これこそ世界に類のない所の本尊である。それ故、御本尊さまの讚に「一閻浮提之内未曾有の大曼荼羅也」とあるのは、印度支那否世界の中において、いまだ嘗てなかつた御本尊なるが故に、未曾有という讚文をつかわれたのである。

「爰を以つて中央に南無妙法蓮華經日蓮判と主しげ玉へり、脱仏の釈迦多宝別体の地涌等は脇士なり、万法総持の南無妙法蓮華經日蓮鉢具の十界聖衆とみる処が觀心本尊也、下種と言はばいづくにありても久遠なり、過去に宗旨を立つるとは是れなり、出過三世の南無妙法蓮華經本因妙の本仏最初下種の導師なり」(要四―一三九ページ)

の我師の本尊鈔抜書も前文を味読する時に役立つと思ふのである。

さて再び日寛上人の御指南を仰ぐと、本尊問答抄に、

「問う末代惡世の凡夫は何物をもつて本尊と定むべきや、答えて云く法華經の題目を以て本尊とすべし、乃至上にあぐるところの本尊は、釈迦多宝十萬諸仏の御本尊法華經の行者の正意也」

(全集三六五ページ)

この本尊問答抄の文の心は、主師親を根本として之を尊敬する故に本尊と名のるなり。これに

人法あり。謂く人即久遠元初の自受用報身、法即事の一念三千の大曼荼羅なり。人に即して是れ法。事の一念三千の大曼荼羅を主師親となす。法に即して是れ人。久遠元初の自受用身蓮祖聖人を主師親となす。人法名ことなれども、その体一なり。これ即ち末法我等が下種の主師親の三徳なりと日寛上人は釈せられておる。

さて観心本尊抄の題号のよみ方だけでも、いくつかあるくらいであるから、この題号に多意あることは申す迄もないが、日寛上人はこの題号に三大秘法を含むと解釈せられておる。

如来滅後後五百歳に始むとは即ち是正法時代像法時代にまだ弘まらざるの義である。すると、観心の二字は正に是れ本門の題目である。その故は、三大秘法の中の本門の題目とは、ただ、本門の本尊を信じて南無妙法蓮華経と唱え奉るを本門の題目と名のるこれは今の観心に相当する。よく信じ、よく唱えるを観心と名づける。故に本門の題目に当るのである。本尊の二字は正しくこれ本門の本尊であり、所在の処は本門の戒壇である。故に如来滅後後五百歳始観心本尊抄とは、これ正像未弘の三大秘法抄と言ふことが出来るのである。

この観心本尊抄の題号のもとに本朝沙門日蓮撰とあるが、これについて日寛上人の釈文を要略してみると、章安大師（五六一—五六三）中国天台の四祖は、日の字に三義ありと言われて（一）に

は高く円明なるは主徳にたとえ、(二)に万物を生長するは親徳にたとえ、(三)に照らして闇をのぞくは師徳に譬うとある。蓮は泥土に染まずの徳種子を失わずの徳、因果同時の徳、その外十八円満等々の深義がある。故に「日蓮と名のる自解仏乘(註七)なるべし」又は「日蓮は閻浮第一の智人なり」「日蓮当世には日本第一の大人(仏さまのこと)なり」「日蓮は一閻浮提第一の聖人(仏さまのこと)なり」「南無日蓮聖人と唱えんとすれども、南無ばかりにしてあらん」「日蓮は日本国の一切衆生の主師親なり」等々聖言あぐるにいとまないので、日本国中の日蓮門下の諸門流は、(昭和御代になつても)この義を知らず、大聖人を僧の位におとし、又は大菩薩と号しておるのは、実は本尊に迷うが故である。

されば日蓮と名のることは、主師親の三徳を表わすことであつて、日蓮大聖人は、久遠にあつては、自受用報身と号し、法華経の靈山にあつては、上行菩薩と号し、今末法にあつては、日蓮聖人と号するのであつて名はことなつても一体の御利益である。血脈抄には「本地自受用報身垂迹上行菩薩の再誕本門の大師日蓮云々」又開山上人の弟子三位日順は「久遠元初の自受用身とは、蓮祖聖人の御事なりと取定め申すべき也」と申されておる。

さてこの観心本尊抄の註釈書は有名なもので約八十冊もあるが、富士系をのぞいては、大聖人のこの書の述作の意が解せられず、

(一) 「この時、地涌千界出現して、本門の積尊の脇士となりて、一閻浮提第一の本尊を、この

国に立つべし」と読んでおる。

これを日蓮正宗では、

(二) 「この時地涌千界出現して、本門の釈尊を脇士となす一閻浮提第一の本尊この国に立つべし」(全集二五四ページ)

と読む。これこそ天地雲泥の相違であるが、先ず日蓮正宗の読み方を先にのべると、それは観心本尊抄のここの個処の前文に「塔中の妙法蓮華経の左右には釈迦牟尼仏、多宝仏」(全集二四七ページ)云々とあつて、妙法蓮華経は本尊の正体で、釈迦多宝は妙法蓮華経の脇士たること明らかである。大聖人さまも「妙法蓮華経こそ本仏にて候」(全集一三五ページ)と申されておる。

さて大聖人さまの書かれた、御本尊は種々あるが、弘安二年の本門戒壇の御本尊は、究竟中の究竟、本懐中の本懐で、三大秘法の随一、そして一閻浮提惣体の本尊である。

ここに天台大師と大聖人さまの不思議をのべるならば、天台大師は隋の開皇十四年御年五十七歳四月二十六日より、止観を始め四年後同十七年六十歳十一月の御入滅。大聖人さまは文永十年四月二十五日観心本尊抄を述作せられ、弘安二七御年五十八歳十月十二日に戒壇の本尊を顕わして後四年の弘安五年御年六十一歳十月の御入滅で、これに三事の不思議がある。

(一) は天台大師は五十七歳にて止観をとぎ、大聖人は五十八歳にして戒壇の本尊を顕す。天台大師は六十歳の御入滅、大聖人は六十一歳の御入滅、これは像法時代と末法時代の教主の順序、

不思議と申すべきであらう。

(二) には天台大師は四月二十六日に止観を始めたが、大聖人は四月二十五日に観心本尊抄を終つておる。天台大師は十一月の御入滅で大聖人は十月の御入滅である。大聖人さまは後に生まれられても下種の教主であられる。故に義は前にあるので、大聖人は二十五日に終り、十月の御入滅、天台大師は、前に生まれられても熟益の教主である故に後になる。是の故に二十六日に止観を始め十一月の御入滅である。これも不思議なことである。

(三) には天台大師も大聖人も入滅四年前に終窮究竟の極説を顕しておる。これも不思議と申してさしつかえない。

また、この脇土云々の前文に大聖人は、

「法華経ならびに本門は仏の滅後をもつて本となし、先づ地涌に之れを授与す、何ぞ正像に出現して此経を弘通せざるや。答えて曰くのべず。重ねて問て曰く如何。答うこれをのべず。又重ねて問う如何。答えて曰く之をのべれば(略)我が弟子の中にもほほこれをとかば、皆誹誇をなすべし、黙止せんのみ。求めて曰く、とかずんば汝賢けんどん貪に墮せん。答えて曰く進退これきわまれり、試みに粗ここれを説かん」(全集二五三ページ)

とある。「我が弟子の中にもほほこれをとかば、皆誹誇をなすべし」と文中にあるが、これはよく味読い

たすべき御文章と拝するものである。前述の

(一)の本門の積尊の脇士となり

(二)の本門の積尊を脇士とする

の(一)の読み方ならば、なんの変化もなく、我が弟子の中に皆誹誇をなすべしの文章は少しも意味のないものとなる。これに対して、

(二)の読み方をして信心を上げむ時こそ「我が弟子皆誹誇をなすべし」の文章が生き、「進退これきわまれり、試みに粗これをとかん」との大聖人が、三請三誠重請重誠せられて説くところの仏意がわかるのである。

七百年後の今日においても(二)の読みかたをして大聖人の正義を伝える日蓮正宗が、(一)のよみかたをする現に積尊を主としていて、しかも日蓮宗門下と称する諸派から、誹誇されておるのは、大聖人が、すでに観心本尊抄において予言をされておると申してさしつかえないのである。

以上で、日寛上人御指南の観心本尊抄文段の抜き書きを終わる。

開目抄において、大聖人が主師親であることを明かされ「我日本の柱とならん。我日本の眼目とならん。我日本の大船とならん」と三大誓願をたてられた大聖人が、この観心本尊抄において「先づ一念三千の出場所を明かし、それより経文に照合して観心の一念三千を示され、次いで一念三千の本尊を説きあそばされ、更にその建立の縁由をのべ、最後に、この御本尊を末代の衆生

にさづける」と仰せられて結びとなされておる。

最後にこの観心本尊抄が、如何に重要な聖文かということは、その副状があることによつて、わかると思つので掲載する。

「観心の法門少しくこれを注し、太田殿、教信房等に奉つる。此のこと日蓮当身の大事なり。これを秘して無二の志をみば、これを開拓せらるべきか。此の書は難多く答少なし、未聞のことなれば、人の耳目これを驚動すべきか。設い他見に及ぶとも、三人四人座をならべてこれを読むことなかれ。仏滅後二千二百二十余年いまだ此書の心あらず。国難をかえりみず、五五百歳を期してこれを演説す。乞い願くば、一見をふるの末輩、師弟ともに靈山浄土に詣でて、三仏の顔貌を拝見し奉らん 恐々謹言

文永十年卯月二十六日

日蓮花押

(註一) 正法時代像法時代は釈尊滅後の教法の時代相で正法時代は一千年つづき、釈迦の法が

正しく行なわれる。像法時代これも一千年の間つづいて、その法は像とは似るの意味で、教をはなれて形式的なる故に一千年の間で前の五百年は読誦多聞時代で説教をしたり経はよむが、実行力がとぼしい。その次の時代は塔寺時代と言つて、寺とか堂宇をつ

くることが、仏教だと思ふ時代、この二千年がすぎると、末法万年の時代なり、末とは無の意味で積尊の仏教がなくなつてしまふ時代、この末法の時代に出る仏様がある。即ち日蓮大聖人である。

(註二) 煩惱とは我々の迷い、業とは我々のしたこと、安国論に「人の夜ものかくに火は滅すれども字は存するが如し、三界の果報も亦々かくの如くならん」とある。苦とは四苦のことをいう。

(註三) 法身とは理性に安住する常住の身。般若とは、法身の徳をとらず智慧。解脱とは前者二者の二徳によつて、ものごとにとらわれない自由な境地

(註四) 三観とは空、仮、中の三種類の観法、三諦、諦とは真理を意味し、すべての存在は実体なしとするのが空諦、縁によりて仮りにあるとするのが仮諦、すべての存在は空や仮で一面的に考えられるものではなくて、言語や思慮の対象をこえたものとするのが中諦
(註五) マンダラとは大聖人によれば、功德のあつまりという印度の言葉で、ここでは本尊をさす。

(註六) 法華經の第十五から第二十二までを言う。

(註七) 仏乗とは法華經のことを言う。教法は一切衆生をのせて煩惱生死の苦界より、菩提涅槃の樂界に運ぶのりものなるが故に、自解とは他から教えられずして、自分から会得す

る、即ち仏の意味と考えてよい。

